

4-2

モラエスを初期に国内外に紹介した会田慶佐

徳島大学モラエス研究会 佐藤 征弥

はじめに

会田慶佐は、ヴェンセスラウ・デ・モラエスの“O “Bon-odori,, em Tokushima”(邦題『徳島の盆踊』)を翻訳した人物として知られている。会田訳の『徳島の盆踊』は、モラエスの死後 6 年経った 1934(昭和 9)年 6 月 22 日から徳島毎日新聞に連載された。翌年、会田はモラエスの七回忌の法要に出席するため徳島を訪れ、座談会に出席したり新聞に回想や翻訳を発表した。筆者は、七回忌における会田の証言や記事から、彼がモラエスのことを存命中から知っており、ブラジル滞在中にサンパウロの新聞にモラエスを紹介し、帰国後モラエスと書簡を交わしたり、日本の雑誌にモラエスを詳しく紹介したことを知った。モラエス存命中における会田のこれらの活動は、これまでのモラエス研究で見逃されていた。本稿では、会田とモラエスの関わりについて紹介し、初期のモラエス紹介者として彼が果たした功績を検証していくことにする。

なお、会田は当時の資料では「會田」と旧字で書かれているが、本稿では「会田」と表記することをことわっておく。

経歴

会田の経歴は、本人が書いた略歴¹⁾によると次のとおりである。1900 年生まれで、外務省留学生としてサンパウロ法科・文科大学に留学した。外務省職員として南米および欧州に約 20 年勤務し、領事を務めた。外務省を離れてからは国会図書館国際交換課長を務めた。ブラジル新聞協会、ブラジルペンクラブ、日本ペンクラブの会員であった。また、モラエスの翻訳者・研究者である岡村多希子によれば、東京外国語大学葡萄牙語学科の卒業生である²⁾。

生前のモラエスとの関わり

会田がモラエスについて日本のメディアに最初に発表したのは、モラエス存命中の 1927(昭和 2)年 7 月に雑誌『ブラジル』に掲載された「我が國をブラジルに良く紹介し得るたゞ一人の葡國人 モラーエス氏と日本」という記事である³⁾。この記事は飯塚春夫というペンネームで書かれており、そのためか今までモラエス研究において取りあげられることがなかった資料である。

記事には前書きがあり、会田は次のように述べている。

當つて東京日々新聞紙上に學友岡本良知君の紹介したモラーエス氏に關する記事が掲載された事がある。それは今から約一年有餘前の事と記憶する。但しあの紹介記事が出た時も單に「そんな男も居るのか」と言ったやうな風な極めて冷淡な態度

を以って一般から迎へられたことは紹介者岡本君にとっても至極残念な事だったろう。今私は同じ事を茲に繰り返したくない、茲で私は新しい刺戟と興奮とを日本国民に興へ得れば満足である。

ここに登場する岡本良知は、会田と同じく東京外国語大学葡萄牙語学科の卒業生で、モラエスを最初にメディアで紹介した人物である。岡本による東京日日新聞の記事が出たのが1年あまり前のことであると会田は記しているが、これは彼の記憶違いで、実際は3、4年前である⁴⁾。おそらく会田は1年あまり前に雑誌『書誌』に発表された岡本による二度目のモラエス紹介記事⁵⁾と混同したのであろう。岡本によるこれらのモラエス紹介記事は期待していたような反響がなく、会田は同じことをくり返したくないと述べている。この記事を会田が自主的に書いたのか、あるいは友人岡本の勧めで書いたのか分からないが、ブラジルでモラエスの著作が読まれていることを強調したのは後で述べるように結果としてうまくいったようである。会田はこの記事の中で、世界で日本があまり知られていないのはラテンアメリカであると指摘し、ラテンアメリカは地理的に遠く、貿易も盛んではなかったが、移民が何万人も行くようになり、日本のことを正しく紹介することが急がれると述べている。このような状況の中で、モラエスの著作はポルトガルはもちろんのことブラジルにおいても読まれているとし、日本人はモラエスをもっと評価し、彼に感謝しなければならないと次のように説く。

ラフカジオ、ハーンの死後に於ける唯一の世界的日本の紹介者であるモラエスを日本国民は果たして顧みるの暇さへないのか。徳島の田舎に住む一老ポルトガルの作家に對して感謝する日は來ないのか。私達は今や静かに死を待ちつゝある同氏に對して一日も早く其存在を知らせ其貢獻を公にし以て舉國感謝しなければならない、又それが當然であると思ふ。

会田は続けて、ブラジル赴任中に現地の新聞にモラエスのことを紹介し、帰国してからモラエスと手紙を交わしたエピソードを次のように紹介している。

一九二四年私は想ひ出したる儘にサンパウロ州に於て外字新聞に同氏の事を書いた事がある、が其際懇意にしてゐた新聞社の人達から同氏の最近の生活を知りたい、是非歸ったら直ぐ通信を送つて呉れとの依頼があつたので、一昨年末日本に歸るや先づ第一に同氏に宛てて書面を飛ばした。同氏からは直ちに返書が來た、極めて丁寧な而も謙遜な文字で埋もれた返事であつた。其を一讀した時に僕は涙をさへ催したのであつた。同氏は次の如く書いてある。

君が言ってくれる程僕の著作は價值のあるものではない、實際くだらないものだ。僕に關する記事は決してポルトガルへもブラジルへも書いてくれるな、そして僕に言はせてくれ。僕の餘生はいくばくもない、それを静かに送りたいのだ、本當に全然孤獨にひとりながら、そして總ての人達から特に僕の祖国の人達の記憶から遠ざかつて、こ

れだけは是非願する……………。

若し君がいつかの機会に僕の所にやって来るならその旅行はちょっと難儀だよ。僕にとっては今迄にない愉快さを與へてくれるだろう。然しながら僕はもう老年だ、それに病身である、總ての人に對する好感さへ失つてゐる、これだけ覺悟してくれ、僕は冷淡の人間になり切つてゐる。僕の家は小さくって便宜も慰藉もないよ。

モラエスは、会田への返信の中で、ブラジルの新聞に自分のことを書いたことを喜ぶどころかむしろ迷惑に感じているというニュアンスで書き送っている。また、会田は徳島のモラエス宅を訪問したいと手紙に書いたが、モラエスは自分にとって愉快的ことではあるが、やめておいた方が良くと遠回しに断っている。

これよりも前に、東京外国語学校の学生である安部六郎と上野忠夫が別々にモラエス宅を訪れたことがあり、モラエスは「ブラボー！」と興奮気味にポルトガルの友人の手紙やポルトガルの雑誌『ルジタニア』に伝えている^{6),7)}。会田に宛てた手紙に書いたように、好奇心に溢れた若者と語り合うのは愉快的なことというのは彼の正直な感想で、徳島では味わうことのなかった刺激であつたに違いない。

なお、会田が1924(大正13)年に記事を書いたというサンパウロ州の新聞の社名や記事の内容は不明である。上記の安部六郎はモラエス宅を訪問した記録を同じ1924(大正13)年にポルトガルの雑誌『ルジタニア』に発表しており⁷⁾、これら二つは日本人がモラエスを海外に紹介した最も早いものであろう。

最後に会田は次のように書いてこの記事を結んでいる。

我々は此大恩人に對して感謝しなければならない。モラーエスが若しも世人の記憶から忘れられて淋しく徳島に於て永遠の休息をする日が來たら我々は又彼を慰むる機會を失ふだろう。讀者諸君！モラーエスはまだ生きてゐる。其の半生を日本の爲に捧げた大恩人を忘れてくれるな。

と、まるで檄文のように情熱的な調子でモラエスへの感謝を表すよう訴えている。ちなみに会田は、この年の同雑誌に本名で多くの記事を發表している⁸⁾。この記事で飯塚春夫というペンネームを使い、外務省関係者であることを隠して發表したのは、その他の記事とは性質の異なる情緒的な文章だからであろう。

では、この記事は会田が意図していたようにモラエスを有名にすることに繋がつたのだろうか。この記事が發表された翌月、ある新聞社(後で述べるが社名は不明である)がモラエス宅を訪問し、インタビュー記事「隠れた恩人訪問記」を紙面に載せた。見出しは「美しい日本をブラジルへ紹介した隠れた恩人 - 徳島市伊賀町に淋しく余生を送るポルトガル人モラエス翁語る」であり、本文は「ブラジルへの渡航熱はいやが上にも上る、商船郵船ともに毎航海満船で神戸を出航する。政府もウンと力瘤を入れて奨励につとめているこの際ブラジルに美しい日本を真に紹介した隠れた恩人のあることを忘れてはならない。」という文章で始まる。この記者が『ブラジル』の会田の記事を読んで取材に行ったことは間違いない。日本からブラジルへの移住が

盛んだった時期であり、日本人にとってはポルトガルよりもブラジルに対する興味の方が格段に高く、ブラジルの視点からモラエスを紹介した会田の目論見はうまくいったと言えるかもしれない。

モラエス生前の記事の整理

次頁の表にモラエスが徳島に移住してから彼の存命中に新聞や雑誌で彼のことが取りあげられたものを、岡村の論文²⁾と著書⁶⁾および『モラエス案内』⁹⁾を参考にまとめた。『モラエス案内』は、編集後記に書かれているように急ごしらえで作製したためか間違いが多く、岡村が指摘しているように、挙げられた文献資料が存在しないものがある。表はそれらを踏まえて修正したものである。

今回の調査により、会田によるものが二つ加わった。また、会田が『ブラジル』の記事を発表してまもなく、大阪朝日新聞、徳島毎日新聞、徳島日日新報の記者たちがモラエス宅を訪ねて8月22日、23日に相次いで記事にしたとされるが⁶⁾、いずれの新聞にも該当する記事が存在しない。徳島県立図書館には、上述の「隠れた恩人訪問記」のコピーが残っており、8月23日の日付が写っているので、この日の記事であることは間違いないが、新聞社名がない。徳島毎日新聞とされているが、別の新聞である。

また、1926(大正15)年に大阪朝日新聞に掲載されたと伝えられるモラエスの紹介記事はこれまで不明とされていたが、『憂曇華』¹⁰⁾や『モラエス案内』に載っている大阪朝日新聞社の野上溪三のインタビュー記事がそれであると筆者は推測する¹¹⁾。

この他に、表には入っていないが、藍谷長三が『モラエス案内』の座談会において、学生だった1923(大正12)年頃に東京日日新聞に出た岡本良知のモラエス紹介記事を読んで興味を持ち、徳島に帰郷した際にモラエス宅を訪ね、その訪問記を新聞に載せたと語っているが、記事の詳細は不明である。

没後から七回忌まで

会田訳の『徳島の盆踊』は、モラエスの死後5年経った1934(昭和9)年6月22日から徳島毎日新聞に連載された。全訳ではなく、前半部分で終わっている。翻訳を始めた経緯については、後で述べる七回忌の座談会で語られているが、依頼されたものではなく、会田が自主的に行ったものと思われる。ちなみに『徳島の盆踊』は、会田の前に上野忠夫により最初東京外国語学校葡萄牙語同学会会報2号(1924))に一部が翻訳されているが、一般の目に触れたのは会田訳が最初である。

表 モラエス存命中におけるメディア等での紹介記事

時期	筆者	メディア	タイトル	備考
1923(大正 12)年か 1924(大正 13)年 ⁴⁾	岡本良知	東京日日新聞	知られざる日本の 理解者	掲載年月日不明。文章 は『モラエス案内』に転 載。
1923(大正 12)年 8 月 16 日(モラエス宅 訪問日) ⁶⁾	安部六郎	『ルジタニア』 (1924)、『東京外国 語学校葡萄牙語同 学会会報』3 号 (1925)	Uma visita ao sr. Wenceslau de Morais	ルジタニアに発表した 訪問記は、日本語訳が 1935(昭和 10)年 7 月 1 日付徳島毎日新聞に掲 載された。
1923(大正 12)年 12 月 28 日(モラエス宅 訪問日) ⁶⁾	上野忠夫	『東京外国語学校葡 萄牙語同学会会報』 2 号(1924)		編集後記にモラエス宅 を訪問した様子が記さ れている ²⁾ 。
1924(大正 13)年	上野忠夫	『東京外国語学校葡 萄牙語同学会会報』 2 号(1924)		上野による『徳島の盆 踊』抄訳 ⁶⁾ 。
1924(大正 13)年	会田慶佐	サンパウロ州の外字 新聞		
1925(大正 14)年 12 月	岡本良知	『書誌』2 号	ウエンセスラウ・デ・ モラエス氏に就い て	
1926(大正 15)年? ¹¹⁾	野上溪三	大阪朝日新聞「キク 人ハナス人」?		『憂曇華』 ¹⁰⁾ 『モラエス案 内』 ⁹⁾ に転載。
1927(昭和 2)年 7 月	飯塚春夫 (会田慶佐)	『ブラジル』	我が國をブラジル に良く紹介し得る た一人の葡國人 モラエス氏と日 本	
1927(昭和 2)年 8 月 23 日		新聞	美しい日本をブラ ジルへ紹介した隠 れた恩人	『モラエス案内』に「隠れ た恩人訪問記」として転 載された。徳島毎日新 聞の記事とされているが 記事の体裁が異なる。

また、その翌年の 1935(昭和 10)年、雑誌『真理』7 月号に会田による「第二の小泉八雲 - モラエスのプロフィール -」という記事が載った¹²⁾。雑誌発行の日付は 7 月 1 日で、ちょうど七回忌の命日にあたるので、それに合わせて書いたものだろう。会田のこの記事もまたモラエス研究において存在を見過ごされていた資料である。内容はモラエスの生涯を簡単にまとめたものであり、目新しい点はないのでここでは紹介しない。

徳島での七回忌法要

モラエス没後、毎年命日には彼を知る僅かな人たちにより法要が営まれていた。それが七回忌を迎えて、ポルトガルの公使や領事、国内の有名作家や中央省庁の官吏や大学教授

などが招かれ盛大に行われた。その背景には、もちろん節目の年ということもあるのだが、前年に徳島県学務部長として着任した湯本二郎の尽力があった。会田も招かれて、法要や新聞社主催の座談会に出席し、新聞に寄稿文を發表している。

徳島の地元紙『徳島毎日新聞』と『徳島日日新報』は、七回忌の模様を連日報じた。命日の7月1日の紙面に、徳島毎日は「モ翁追悼特集」、徳島日日は「モラエス翁追想」と題した特集を組んだ。会田は徳島毎日に「モラエスの追憶」という文章を、徳島日日には妹フランシスカからの手紙の翻訳を載せた¹³⁾。

以下、徳島毎日の「モラエスの追憶」を簡単に紹介する。記事の前半は先に紹介した『ブラジル』に發表されたものと重複するので引用しないが、モラエスと手紙のやりとりをしたことが書かれている。

僕は昭和二年八月發行雑誌『ブラジル』に『モラエスと日本』なる一文を掲載せしめ、其末尾に於て『モラエスが若しも世人の記憶から忘れられて淋しく徳島に於て永遠の休息をする日が來たら、我々は又彼を慰むる機会をだに失うであろう讀者諸君！モラエスはまだ生きてゐる。其半生を日本の爲に捧げた大恩人を忘れてくれるな』と書いてゐる。

上の文章から『ブラジル』の記事の執筆者飯塚春夫は、会田のペンネームであることが判る。そして、これを發表してから2年後、彼はモラエスの訃報をサンパウロで目にした。

然しながら僕の希望は充たされなかつた。僕は昭和二年の春再び任地サンパウロへ去つた。其後も彼を忘れる事がなかつたが、昭和四年七月二日のリスボン電報は突然彼の死を我々に傳へた。其の時僕は『やっぱり來るべき時が來たのかなあ』と暫くは瞑目してあの僕宛の手紙を書いてゐたモラエスの面影を想像するのであつた。モラエスの事跡を内外に顕彰したいと言うのは僕の年來の念願であつた。一昨年夏一週間餘を此の徳島縣に於て事跡調査の爲に過ごしたのも其の準備のためであつた。幸いにも僕はまだ海外にも赴任せず日本に止まり再び徳島の地を踏みモラエスの七周忌法會に參列する機会を得たのである。これも何かの因縁かも知れない。

モラエスが亡くなって4年後の1933(昭和8)年に徳島に來て調査したと書いているが、翌年に『徳島の盆踊』の翻訳の連載が始まつたことを考えると、予めそのつもりで徳島を訪れたのではないだろうか。また、それから2年近くのあいだ日本に滞在していたことについても、「幸いにも」とさりげなく書いているが、翻訳に集中するために会田が希望したことかもしれない。次に紹介する座談会での談話を読むと一層そのように感じられる。

モラエス翁を偲ぶ座談会

七回忌の催しとして徳島の新聞二紙はそれぞれ座談会を企画した。徳島日日は、生前に交

流の深かった人々を集めて「モラエスさんを懐かしむ座談会」を開き、徳島毎日は法要に出席するため集まった著名人たちを招いて「モラエス翁を偲ぶ座談会」を開いた。会田は後者の方に出席した。この座談会は 1935(昭和 10)年 6 月 30 日に開催され、出席者は、ポルトガル側から公使メロと領事スーザー、徳島側からモラエスの知己前田正一と森房子、県学務部長湯本二郎、光慶図書館長坂本章三、徳島市長藤岡直兵衛、作家として花野富蔵と佐藤春夫、日本文化連盟から松本学、石川通司、宇野正志、文部省成人教育課長松尾長造、外務省書記生会田慶佐、東京外国語大学教授星誠、そして徳島毎日新聞から主筆の井上をはじめとする 6 名である。この座談会の模様は「モ翁を偲ぶ座談会」として 7 回に分けて同紙に掲載された¹⁴⁾。

座談会の席上で、会田は『徳島の盆踊』の翻訳について次のように語っている。

私はモラエスと云ふ男が日本に永く滞在し殊に徳島には十數年も隠遁生活を送りそして著書によって日本を相當世界に知らせてくれてゐるのに日本人が誰れも知らない。それから徳島の地元の人も知らないと云ふ事を甚だ遺憾と思つてゐましたのであります。

(中略)

七周忌を期してモラエス翁の存在を世に知らせるそれは先づ一番に地元の徳島からこの運動を起こさなければならぬと考へそれで徳島に關係のある著書『徳島の盆踊』を簡単に翻譯して徳島市民に捧げたのであります。

また、連載が途中で止まっている翻訳の続きについては次のように語っている。

徳島の盆踊は只今翻譯されてゐるのは前半でありまして後半も近く出す積り目下盛んに筆を入れてをりまするが仲々進みませぬ、未だ相當時間がかゝるかと思ひます

しかし実際は、後半部分は発表されず、花野富蔵が訳した『徳島の盆踊』¹⁵⁾がこの年に出版されるという奇妙なことが起きた。なぜそのようなことになったのか詳細は分からないが、この座談会には花野も参加しており、『徳島の盆踊』について次のように語っている。

モラエスさんの傑作と言われる『お米と小春』『茶の湯』等非常に文藝的のものはかなりの用意をして、かゝらないと非常に文章が平易だと言ふて、その儘譯するとそれ丈含みと云ふものが失はれるのではないかと思ふのであります。特に『徳島の盆踊』等はこの點を會田さんが非常に苦心をされたのではないかと思ひます『徳島の盆踊』は單に身邊の出來事をその儘に書かれたものでありまして、筋もなければ……本筋がない單に文章の妙味丈で讀ませてゐるので餘程困難であつたらうとお察し致してゐる次第であります『お米と小春』の方になると興味あり中心人物があつて所謂本筋が通つてゐるので讀者も面白く讀んで呉れるのでせうが『盆

踊』の方は無味乾燥な感じを讀者に興へ易いだけに譯者の苦心があります。

花野は会田の苦勞をねぎらっており、自分も『徳島の盆踊』を翻訳しているとは言っていない。この年に花野の翻訳本が出たので、作業は相当に進んでいなければならないが、この時の彼の話からそれをうかがうことはできない。会田の翻訳が出ずに花野の翻訳が出たことに対して、本人たちの了解がなかったとは考えられず、この座談会の後で話し合いがあったのかもしれない。外務省の仕事を持つ会田が、花野に任せたと考えるのが自然だろうか。

以上、会田の功績を紹介してきたが、モラエス七回忌以降、会田によるモラエス関連の仕事は、調べた限りでは見つからない。

終わりに

会田慶佐は、モラエスの生前から没後七回忌に至るあいだ、精力的にモラエスを国内外に紹介した。会田の文章を読むと、彼ほど情熱的にモラエスを賛美し、熱意をもって顕彰に努めた者は数少ないと感じる。しかし今日彼の功績は過小評価されている。その理由は、外務省の職員として長く日本を離れていたことや、海外の赴任地がブラジル中心であり、ポルトガルと関わるのがほとんどなかったため、結果として日本やポルトガルのモラエス研究者と交流を深めることができなかったことによると考えられる。また、『徳島の盆踊』の翻訳を続けられなかったことも関係しているかもしれない。しかし会田が日本の恩人であるモラエスを忘れるなど訴えたように、現代に生きるわれわれもまたモラエス顕彰の恩人である会田の功績を忘れてはいけないだろう。本稿が会田を再評価するきっかけになれば幸いである。

註

- 1) 会田慶佐。「南米の新国際予定線」.人文地理 5巻5号, 76-378頁.(1953-1954).
- 2) 岡村多希子。「戦前におけるモラエス顕彰」. 東京外国語大学論集 第42号, 183-200頁.(1991).
- 3) 飯塚春夫。「我が國をブラジルに良く紹介し得るたゞ一人の葡國人 モラーエス氏と日本」. ブラジル 第1巻7号, 33-37頁 (1927). 本文中で述べたように会田慶佐が飯塚春夫の名前で書いた記事である。
- 4) 岡本良知。「知られざる日本の理解者」. 東京日日新聞. 発表時期は未確定である。この記事を転載した『モラエス案内』では発表時期を「大正13年?」としている。同じく『モラエス案内』に載っている座談会において、藍谷長三は「大正十二年位」と語っている。しかし岡村が2

年分の同紙を調査したが、該当の記事を見つけることができなかった。

5) 岡本良知。「ウエンセスラウ・デ・モラエス氏に就いて」.書誌 第2号, 31-32頁.(1925). 同誌には、この記事に続いてモラエス著 “Fernão Mendes Pinto no Japão” を岡本が翻訳した「メンデス・ピント雑考(一)」が掲載されている。

6) 岡村多希子.『モラエスの旅 - ポルトガル文人外交官の生涯』.彩流社. (2000).

7) 1924年の『ルジタニア』(LVSITANIA)の2巻の439頁にモラエスの文章が載っており、ポルトガル語を話す二人の日本人学生が訪ねてきたことを”Bravo!...”と伝えている。また同巻の27-32頁には、最初に訪ねた阿部六郎による訪問記 “Uma visita ao sr. Wenceslau de Moraes” が掲載されている。

8) 会田慶佐は『ブラジル』に多くの記事を本名で発表している。1927年をみても「伯國に於ける新文藝運動に就て」「サンパウロの文藝印象記」「ブラジルの生んだ二大詩人」「ファグンデス・ヴァレーラの生涯」「オレーボ・ビーラックとジュゼ・デ・アレンカールの事ども」「歌集「路上にて」其他」「サンパウロ州開発史(一)～(四)」を発表している。また、タイトルから会田が文学に対する関心が高かったことがうかがえる。

9) 佃実夫編.『モラエス案内』.徳島県立図書館.(1955). 1995年には増補・再版が徳島県立図書館から発行された。

10) 濱本房子編集発行.『憂曇華』.(1930).

11) 『憂曇華』と『モラエス案内』には、大阪朝日新聞の野上溪谷三による「ありし日のモラエス氏を訪ふ」という記事が載っている。題名からすると、モラエスが亡くなってから彼を偲んで書かれたように思われるが、内容を読むと生前に発表された記事をそのまま転載したものであることが分かる。詳細なインタビュー記事であり、大阪朝日新聞の企画「キク人ハナス人」に載ったとされる記事がこれであろう。『憂曇華』の中でモラエスの知人前田正一が、「キク人ハナス人」が発表されたのは1926(大正15)年と書いている。モラエスの死後、追悼本『憂曇華』を作成した濱本が、この記事に「ありし日のモラエス氏を訪ふ」という題をつけたのではないかと筆者は推測する。その後作られた『モラエス案内』は、出典不明のまま『憂曇華』のままこの記事が載せたのであろう。

12) 会田慶佐。「第二の小泉八雲 - モーラエスのプロフィール -」.真理 7月号, 82-87頁.(1935). 同誌の目次ではタイトルが「第二の小泉八雲(モーラエスの横顔)」となっており、本文と異なる。

- 13) 記事は「モラエスとフランシスカ」と題されており、上下に分けて 1935(昭和 10)年 7 月 1 日と翌 7 月 2 日の徳島日日新報に掲載された。
- 14) 「モラエス翁を偲ぶ座談会」の様子が掲載された記事を切り抜いてまとめたものが徳島県立図書館に収蔵されており、本稿はそれを参照した。
- 15) ヴェンセスラウ・デ・モラエス著. 花野富蔵訳. 『徳島の盆踊』. 第一書房. (1935).